

精神病院の息子に生まれて

ー状況からの意味を求め続けた25年の歩みー

智田文徳

まずは、フランクルの言葉を引用します。

人間の行動は人間が遭遇する条件に左右されるのではない。
行動はその人自身が下す決断によって左右されるのだ。

(勝田茅生 記)

私の父は、私が0歳の時(1973年)に岩手県都南村(現在の盛岡市南部)に精神科病院を開設しました。それから24年近く、多くの方々に支えられながら病院の規模を拡大させ、地域精神科医療に貢献すべく精神科病院を運営していました。しかし、私が医科大学6年生だった1996年12月にスキルス性の胃がんを発病、すでに手遅れの状態でした。1997年4月私の医師国家試験合格発表を見届けるかの様に、58歳で亡くなりました。大学を卒業して医師としても、社会人としても1年目だった私ですが、父の遺志を引き継ぎ法人の理事長となりました。24歳でした。父が亡くなった時の法人の収入(1997年3月決算)は29億9千9百万円、税引き後純利益は4千2百万円の赤字、期末の借入金残高は28億1百万円という最悪な経営状況での引き継ぎでした。

さて、ここで、2018年2月3日に放送されたNHK ETV 特集『長すぎた入院、精神医療・知られざる実態～精神科病院に入院54年～』を紹介します。

精神科病床大国、日本、世界の病床のおよそ2割が集中し、長期間、精神科病院で過ごす人が少なくない。国連やWHOなどからは「深刻な人権侵害」と勧告を受けてきた、その内実はほとんど知られることはなかった。ところが、原発事故をきっかけにその一端が見え始めてきた。人生の大半を病院で過ごした人、入院治療の必要のなかった人。番組では、患者たちの人生を追うとともに、なぜ、この